

高密度播種苗への灌注処理による病害虫防除効果 および苗質への影響

1 背景・目的

育苗箱灌注処理用の殺菌殺虫剤は、灌水と同様の作業手順で散布できる新規の病害虫防除方法である。そこで、慣行より種もみの量が多い高密度播種苗への灌注処理による防除効果、苗質への影響について実用性を確認する。

2 技術のポイント

- (1) 高密度播種苗(乾籾 250g/箱)に対するシアントラニプロール・イソチアニル・ペンフルフェン水和剤(以下 CIP 剤)の移植7日前または移植当日の灌注処理は、イネミズゾウムシ、紋枯病ともに慣行の箱粒剤と同等以上の防除効果が認められる(表1)。
- (2) 移植7日前の灌注処理では若干の徒長が見られ、根張りが不足する場合があるものの(表2)、移植後の生育に影響はない(データ略)。

表1 イネミズゾウムシ、紋枯病に対する防除効果

供試薬剤	処理方法				イネミズゾウムシ	紋枯病
					幼虫・土菌数合計 (6/22調査)	被害度 (9/5調査)
CIP剤	灌注処理	移植7日前	0.5L/箱	50倍	0	8.0
CIP剤	灌注処理	移植当日	0.5L/箱	50倍	1	3.1
対照)クロラントラニプロール・ チフルザミド・プロパナゾール粒剤	粒剤散布	移植当日	100g/箱	-	0	11.6
無処理	-	-	-	-	31	25.0

表2 苗質調査結果

試験区分	薬量 (L/箱)	苗丈 (cm)	第一葉鞘長 (cm)	葉齢	最長根長 (cm)	地上部乾物重 (mg/本)	マット強度 (N)	充実度 ¹⁾ (mg/cm)
CIP剤 7日前処理	0.5	11.1	4.2	1.96	4.8	8.8	55.4	0.79
無処理	-	10.6	3.5	1.98	3.9	10.4	79.1	0.98

1) 地上部乾物重と苗丈の比

2) 表中の*は5%水準で無処理区との間に有意差あり、n.s.は有意差なしを示す(t-test)

3 成果の活用と留意点

- (1) 薬液を十分吸収させるため、薬剤処理の直前・直後の灌水は控える。
- (2) 本剤は移植10日前～当日に使用できるが、処理による根張り不足を避けるため、移植日により近い時期に処理することが望ましい。マット形成が充分でない場合は、苗取り板を使用するなど取り扱いに注意する。
- (3) 使用にあたっては、農薬のラベル及び農林水産省のホームページ「農薬登録情報提供システム(<https://pesticide.maff.go.jp/>)」から最新の登録内容を確認し、適正に使用する。

問合せ：生物資源グループ TEL 076-257-6911
担当者：大野史佳・新保佐知・安達直人